

史遊サロンの通信

No 267 号
平成30年
11月5日

編集
042-754-9360
arai-hiroshi@
jcom.home.ne.jp
新井宏

新発見

駿府に「秀吉の城」があつた!!

中島 茂

JR静岡駅から北へ徒歩十五分のところに「駿府城公園」がある。

歴史をさかのぼると、大御所家康が築いた駿府城は一六三五（寛永十二）年の火災で焼

今月の史遊サロンは予定通り第三土曜日の十一月十七日です。会場は定例の銀座ルノアール八重洲北口会議室で三時開始です。

なお、来年一月の史遊サロンも予定通り第三土曜日の一月十九日ですが、会場の都合で開始が三時半になります。「自由執筆」については、随時お寄せ下さい。「埋め草」も大歓迎。

失した。御殿や櫓などは再建されたが、天守は再建されず、天守台だけとなった。

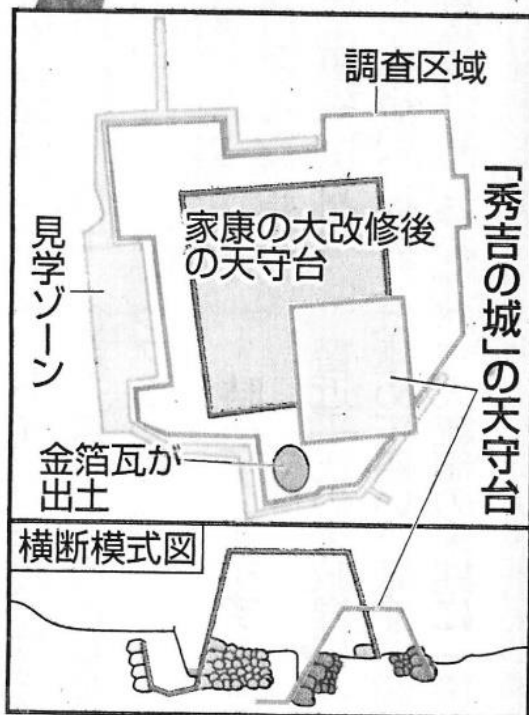
明治維新により廢城となった後、明治二十九（一八九六）年、跡地に陸軍歩兵第三四連隊が設置される際、天守台は取り壊され、その土砂で本丸堀が埋め立てられた。

その後約九十年、平成期に入って「巽櫓」と「東御門」さらに「坤櫓」が再建され、往

事を偲ぶよすがとなっているが、平成二十八年から広大な公園整備の前提として天守台跡地の大規模な発掘調査が進んでいる。その結果、大御所時代の家康の天守台は、底辺付近で六十八メートルあり、江戸城の現存する天守台のそれよりも長辺・短辺とも二十メートルほど大きいことが判明した。

さらに今年驚くべき発見が続いた。（左の図面を参照されたい）。

六、七月に出土した三三〇点の「金箔瓦」は、家康の関東移封後に秀吉の命を受けて駿府に入城した中村一氏時代の瓦と特定された。



ついで八月までに大御所時代の天守台跡の内部から南北約三十七呎×東西約三十三呎の土台が発見され、それは自然石を積む「野面積み」であった。

「野面積み」では高さは十呎が限度であるといわれ、慶長期に発達した「打ち込み接」の工法とは異なるものである。

以上のことから大御所時代の駿府城の前に「秀吉の城」が存在したことが明らかになった。

新聞・テレビのニュースを受けて、十月二十日(土)午前十時から発掘現場の「臨時公開」があった。

現地の説明者は気持のたかぶりを抑えきれない様子であったが、わかりやすい口調で発掘の全体像を語った。

「野面積み」と「打ち込み接」の工法のちがいがよくわかった。

説明者は「秀吉が中村一氏に命じて豪華絢爛たる城を築かせた意図は二つある」という。

江戸に移封した家康に対し、秀吉の富強・威光を見せつけるためと、家康が離反した場合に備える防衛の第一線たる役割を果たさせるためであった。

関東・東北の諸大名は、まず駿府に伺候し、ついでに大阪に向かい秀吉に伺候し、忠誠を誓ったのではないか。

十数年後天下を制した家康は、駿府城を改修するにあたって中村一氏による天守を封じこめ、その上に自らの大天守を構えたのである。

帰途見学ゾーンから少し離れたプレハブ造りの発掘情報館きやっしる」に入ってみた。

陳列ケースの中には見学現場で見られなかった「金箔瓦」があった。円形の瓦には確かに金箔が見られた。

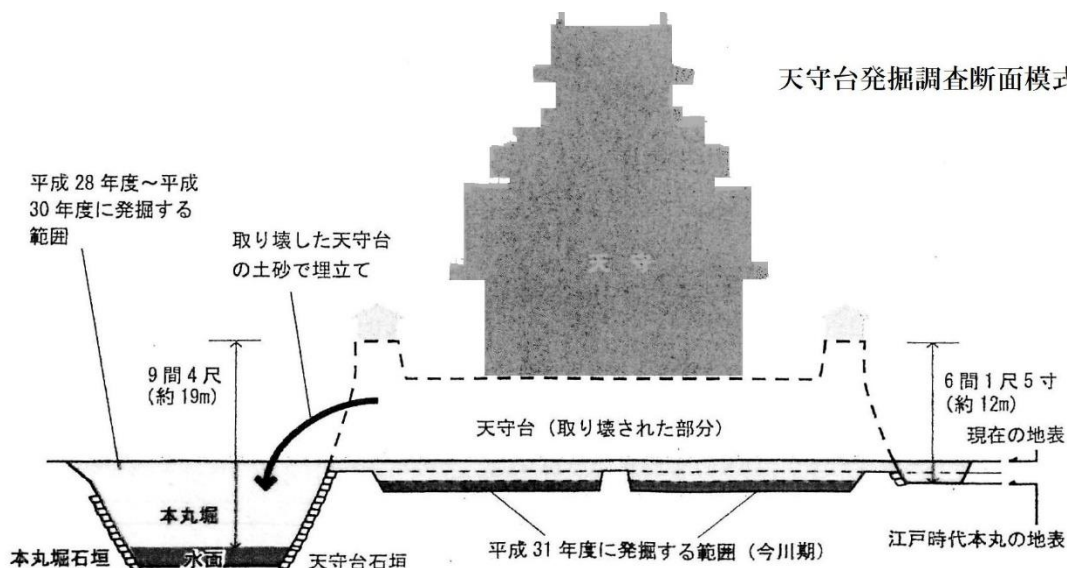
秀吉にとっても、徳川にとっても、駿府城は戦略的にきわめて重要な地であったのだという思いを新たにし、「東御門」から外に出た。

なお十二月一日(土)には「特別体験見学会」が予定されており、ふだん入ることができない発掘調査区域内の見学や天守台の高さが体験できる。

今からわくわくする思いでその日を待っている。

平成三十年十月二十三日記

天守台発掘調査断面模式図



出雲大社再考 (二二)

異説 「出雲国造神賀詞奏上」

村上 邦治

八世紀初めから出雲国造が奈良朝廷に赴

き、天皇に長寿や繁栄をことほぐ賀詞とも寿詞とも呼ばれる祝詞を行った儀式が神賀詞奏上と呼ばれるものである。この奏上文については『延喜式』(九二七年)祝詞の最後に全文が掲載されている。

『続日本紀』元正天皇七一六年二月に、「出雲国造・外正七位上の出雲臣果安が、斎をすまして神賀事(治世を祝福する寿詞)を奏上した。神祇大副の中臣朝臣人足が、その寿詞を天皇に奏聞した。この日、百官たちも斎をした。果安以下祝部に至るまで百十余人に位を進め、身分に応じて、物を賜った。」(『続日本紀』全現代語訳 宇治谷孟)

次は七二四年広嶋に交代したとして同様な記載があるが、奏聞者などの記述はなく若干簡略な記述となっている。

史料では八三三年までほぼ国造が交代した都度、平城、平安京に出雲から出向き、同様な天皇への長寿や繁栄をことほいだ。

この宮廷儀式は何のために行われたのかについては、多くの説がある。

通説は、大和朝廷に服属した氏族がその儀礼として行うもので、東国の蝦夷などに誇示し、天皇の権威を高めるためとするものである。

最近では、天皇の即位時に重なることも多いので、新天皇を祝う儀式の一つとする見解も出されている。

出雲国造側の見方は、熊野大神や大国主大神という神徳の高い出雲の神々が国造の躬通して天皇に奏する、いわば天皇を御護りする神々を代表して吉事(吉詞いずれもよごと)慶事がおよぶことを言霊の働きで生じさせるものとしている。

この儀式には細かく『延喜式』に定められており、国造は一年間の潔斎を行い再度奏上することになっており、出雲国造にとって極めて重要な務めである。

しかしこれらの説には疑問が多い。従属されたのは出雲だけではない。大和以外すべての諸国ともいえる。しかも何世紀も前のことである。天皇交代時の祝賀儀式との説も、当

てはまらない天皇も多い。これまでの説を素直に認めることには躊躇する。

そこで新たな解釈を試みたい。これらの説はいずれも書記神話がすでに多くの貴族や官吏に、受け入れられ広く知られ熟知されていたことを前提にしている。しかし正史である『日本書紀』が完成し上程されたのは七二〇年である。ところが最初の奏上は完成四年前のことである。

古代出雲が大和朝廷に征服され国譲りに至ったとする神話は、『日本書紀』に登場して、初めて多くの貴族・官吏や神官などに知られたのではなからうか。

そのように考えると、最初と二回目の奏上の時機が重要な意味を持つと思われる。

『続日本紀』の七二四年二月

「従六位上の紀朝臣清人と正八位下三宅臣藤麻呂に詔し、国史(日本書紀)を選修させた。」との記述がある。『日本書紀』の編纂は六八一年天武天皇が「川嶋皇子、忍壁皇子らに『帝紀』と「上古の諸事」を記し校定された。」との記述から、この時から始まったとされる。しかし編纂事業はなかなか進まず、天武天皇生存時には完成しなかった。次の持統天皇、更に文武天皇在任中にも編纂は終了せず、ようやく天武が亡くなって三十年後元

明天皇になってほぼ纏ったのであろう。そこで七一四年の書記編纂のための人材補強がなされたものと思われる。

国史編纂最大の問題は、神話の世界から始まり神武天皇へ継承される物語を、いかに万民とくに政府高官や貴族たちに納得させるかにあったと思われる。

時の権力者藤原不比等は文武の夫人として娘宮子を入内させ、首皇子（聖武天皇）が誕生、将来天皇になる首皇子の外祖父になるのだが、将来天皇の地位を強固にするために、遅れていた編纂に力を注ぎ、しかも創作したのであろう天皇継承神話を、いかに貴族や官吏百官たちに納得させるかに注力したはずである。すでに『古事記』は七二二年に撰上されていたとはいえ、朝廷の一部に止まっており、多くの貴族は知らなかった可能性が高い。

そこで、先ず『日本書紀』の神話が出来上がったと思われる七一六年、出雲国造の「神賀詞」奏上儀式を挙行し、百官に神話を披露したものと思われる。

不比等は七二〇年五月『日本書紀』を完成させ、元正天皇に奏上したその三か月後の八月に死没する。

完成後も書記神話を納得させるには、当時の朝廷（左大臣長屋王）は心配であったであろう。書記神話の根幹をなす、大国主命の国譲り神話を再現した出雲国造の「神賀詞奏上」儀式を再度挙行することで、神話の定着を図ったのであるまいか。それは神話の大半を占め「国譲り」した大国主命を祀る出雲国造を呼び寄越すことではかできないことであった。

天皇を始め百官が参列した宮廷行事「出雲国造神賀詞奏上」は書記神話の真实性・正統性・信頼性の波及を狙ったものであった。

第一回の儀式を多くの資金をかけてまで挙げできたのは、右大臣藤原不比等でなければできなかった。七二〇年隼人の反乱、陸奥蝦夷反乱が続く中、二回目の儀式も天皇継承の正統性を納得させ、権威を高めることに力を注ぐ必要性があったのである。

この奏上の中に出てくる出雲国造の祖天日穗命の国史と奏上文との相違や、神話にない熊野大神について、正史と異なる奏上を天皇出席の下百官の前で、中臣の臣が代奏するはずはあり得ない。『延喜式』の奏上文は出雲大社の神階が、『日本書紀』の普及と共に神階が上がった九世紀ごろ変化したものを、掲

載したものであり、当初の奏上文ではあるまい。

国史『日本書紀』は官吏登用の必読書になり、講義は早くから開始されもはや神話の事実や天皇の正統性が懸念されなくなった九世紀に、『延喜式』掲載の奏上文になったものと解する。

八世紀後半以降次第に儀式の記述も「その儀常の如し」と簡略化され、出雲国造の奏上儀式は八三二年で史料から消えている。もはや出雲国造の奏上は朝廷にとって不要となったのである。

参考文献

『出雲大社』

千家尊統

学生社

『古代出雲を知る事典』瀧音能之東京堂出版

『史遊サロン通信』二六六号で村上邦治さんの原稿「出雲大社再考(二〇)」を載せるべきところ、誤って「出雲大社再考(一九)」を載せてしまいました。お詫び申し上げます。

既に『訂正版』を例会で配布済みですが、出席されなかった方には本号に同封してお送りいたします。

朱子学に里帰りしている韓国

新井 宏

本庶佑先生が「免疫チェックポイント阻害因子の発見とがん治療への応用」により今年のノーベル生理学・医学賞を受賞した。5年前には文化勲章も授与されている。

その本庶先生の受賞談話がとても刺激的で面白かった。

教科書に書いてあることは信じない。ネイチャーやサイエンス(の論文)も十年たてば残っているのは一割だ。自分の目で確認できるまでやる。自分の頭で考えて納得できるまでやる。

おそらくノーベル賞受賞者の多くが、似たような考え方を抱いていると思う。

ところで、科学分野のノーベル賞の発表時期になると韓国は憂鬱になる。日本人では既に二十三名も受賞しているのに、韓国では未だ零であり、事前の候補に挙げられる有力な研究もあまり居ない。国別の研究開発費総額の対GDP比率を見ると、韓国はイスラエルを抜いて世界一位なのに、どうして基礎研究は不毛なのかと、毎年のように懺悔、慷慨している。

もちろん受賞者が出ないのは、歴史的過程の問題で、いずれ韓国の時代が来るかもしれない。しかし、同じく第二次大戦後建国のイスラエルは既に六名もの科学系ノーベル賞を受賞している。

韓国の大学に足かけ八年間通った頃から感じていたことであるが、韓国ではみんなが即効性のある研究ばかり後追いしている。それも研究費を取得するため、空想的な「作文」まで駆使して、予算を獲得しているので、研究費が付いてから、研究のスタートさえ切れずに終わってしまうケースも多い。

そこに本庶先生の発言である。「教科書に書いてあることは信じない」。

以下は私の勝手な連想である。

朱子学に支配された韓国

韓国は李氏朝鮮の時代から、徹底的な朱子学信奉の国である。朱子学の本家、明国が女真族の後金に滅ぼされると、李朝は自らを中国の正統な儒教の伝統を継承する国と考え、清朝や周辺国、西洋を夷狄とする思想によって小中華を称えた。ここでは陽明学が異端とされ徹底して排除される。

朱子学の祖、朱熹(1130~1200年)は、宋(北宋)が北狄と蔑んでいた金の侵攻を受け滅ぼされ、江南の地に逃れ南宋となった時期に、訓詁学が中心であった儒教に、経書の注

釈によって思弁性を付け加え体系化し朱子学を作り上げた。そのため朱子学は生まれながら、漢民族の優越性を説き、支配階級の行動原理を説く排他的独善性を内包していたので、科擧に重用された。

一方、王陽明(1492~1529年)は朱子学に学びながら、それを批判的に継承し、読書のみによって理に到達することはできないとして、仕事や日常生活の中での実践を通して心に理をもとめる実践的な陽明学を起こした。

朱子学は朝鮮を経て日本に入って幕府の官学となったが、日本では科擧がなかったこともあって、民間ではむしろ陽明学が盛んになった。朱子学と陽明学の差などもちろん良く理解していないが、ちよつとかじって見ると四書『大学』にある「格物・致知」という二項の理解に典型的な差があると言う。

すなわち、朱子学では「知を致すは物に格(至る)に在り」と読んで、自己の知識を最大に広めるには、それぞれの客観的な事物に即してその道理を極めることが先決であると解釈している。それに対して、陽明学では

「知を致すは物を格(正す)に在り」と読んで、生まれつき備わっている良知を明らかにして、天理を悟ることが、すなわち自己の意思が発現した日常の万事の善悪を正すことであると云う。相変わらずさっぱりわからない。

それではといふので、日本において陽明学者と言われている人物にはどんな人物がいたか挙げてみると、中江藤樹、熊沢蕃山、三輪執齊、佐藤一齋、大塩平八郎、山田方谷、河井継之助、横井小楠、橋本左内、西郷隆盛、吉田松陰、雲井龍雄、安岡正篤と実に多彩である。官学(朱子学)の中心・昌平黌の儒官(総長)を勤めた佐藤一齋さえも『陽朱陰王』と言われてはいたが、陽明学者に分類されている。

これらのことを踏まえて、「格物致知」の解説を見ると、朱子学が「知を致し」(あるべき理を極め)「物に至る」(あるがままの現実に至る)として問題を解決するのに対して、陽明学では「知を致す」(あるべき理を極め)「物を正す」(あるがままの現実を正す)として異を唱えているらしい。

それは中国において、朱子学が経書の註釈書を完成し、科挙の經典となり、理想主義、原理主義に向かうと同時にまた訓詁学に墮する道でもあった。まず「経書を学び調べ極めてから行動する」風土は言い訳のうまい秀才を連想させる。いわば「教科書に書いてあることは信じない」という風土とは正反対の世界である。

それに対して陽明学は、同じ儒学であつても、有るべき理に学び、あるがままの現実に

合わせて改革して行く力を持っていた。「知行合一」の用語のように、知識と行動は一体でなければならなかった。

陽明学が江戸、明治期の日本における改革運動をリードしたのに対して、朝鮮では何も改革し得なかったことに繋がったとみる見解が多い。

陽明学雑誌『致知』

ところで「致知」という言葉をつい最近見た。三戸岡道夫さんに送って頂いた人間学を学ぶ月刊誌『致知』十月号である。その中に、三戸岡さんと童門冬二氏の「人生で大切なことは歴史から学んだ」という対談が載っている。上杉鷹山、徳川慶喜、二宮金次郎らを縦横に語って読みやすい記事であるが、『致知』は安岡正篤に繋がる「陽明学」の機関誌的な役割を持つ雑誌のようである。

ついでに述べると、朱子学や陽明学が南宋から明にかけて生まれたのは、それまでの儒教が仏教や道教の持つ宗教的な哲学を持たないことを改革する動きであつたと言う。脈絡なく言えば、本家の陽明学は、道教から多くの影響を得たというし、日本の陽明学も神道と結びつき、戦後に至るまで日本の政治家の精神的な拠り所であつた。

そう言えば、当会会員の村上邦治さんも、出雲大社宮司千家尊福が「人は死後、幽冥界

に行き、現世の行いを大国主神の審判を受けることになる」と提唱し、幽冥界を人々に教え導くことで、神官が熱望した神葬祭をやれるようにして、財政基盤を確立しようとしたと言う。朱子学や陽明学が儒教に仏教、道教の哲学を導入した経過にも、似た状況があつたのかも知れない。

通説的な朱子学と陽明学の紹介

さて、ここまで書いてみて、あまりにも儒教や朱子学、陽明学に無知な自分を知る。そして思い立って朱子学、陽明学と名の付く書物や論文を十五編ほど手元に集めた。さあ、これから精読してみても、あわよくばその成果を『まんじ』で紹介して見たい。

しかし先を急ぎたいので、まず判りやすいが通俗的な情報を数多くリストアップする。學術的には不正確でも、朱子学や陽明学が韓国や日本に与えた影響を考える時には、かつて役に立つかも知れない。もちろん、通俗的な情報は、朱子学や陽明学の一断面を誇張しているので雑多である。原文通りに引用すると長くなるので適当に要約する。

◇ 井沢元彦(作家『逆説の日本史』など)

●朱子学は史実より理想を優先する。都合によって史実を理想で書き換える。●朱子学と民主主義は水と油、朱子学が中韓の反

日感情を煽っている。●朱子学の貴穀賤金の思想は、経済発展を蝕む「毒」である。

◇ 司馬遼太郎(作家)

●朱子学は、宋以前の儒学とは違い、極端なイデオロギー学だった。●朱子学で「正邪」を論議すると、正の幅が狭く鋭くなり、針の先端の面積もなくなってしまう。大義名分を論じ始めると、カミソリのような薄刃を研ぎにといで、自傷症のように自らを傷つけ、他を傷つけたりもするイデオロギー。●朱子学は、妥協を許さぬ方向へ人を駆り立てる思想、「水戸学」は、幕末の志士たちに大きな影響を与えたにもかかわらず、維新後に水戸出身の姿は見えない。

◇ 伊東乾(東大物理卒、作曲家||指揮者)

●中韓にノーベル賞が取れない理由は、朱子学的な、実態を見ない前例遵守、權威主義にとらわれて、目の前で起きるファクトをきちんと評価することができないためで、權威主義は自信喪失の裏返し。●私(伊東)たち理学部で物理を学んだ者は、基本的に「人の言うこと」を信用しない。自分で確かめて、初めて納得する。(本庶先生と同意見、私も物理出身なので全く同意見)。

◇ 小倉紀蔵『入門朱子学と陽明学』

●朱子学は、儒教の全思想を強引に体系化した。根本はひとつであるが、結局は二つにわかれている。陽明学は心を全てに同期させるエネルギー。表面上は二つにわかれているように見えるが、根本はひとつ。●私(小倉)がかつて学んだ韓国は、まさに朱子学が生きて運動している社会であった。

◇ 安藤英男『日本における陽明学の系譜』

●朱子学は官学となり、いやしくも異説を唱えるものは異端として排斥した。とにかく形式にながれ、学理の末に走って実行が伴わない。朱子学は社会における身分秩序をたいせつにする教義。

◇ 三浦国雄『朱子』

●李朝では、朱子学の最も形而上的な部分である理気説と、最も形而下的な部分である礼の両極に集中し、五百年にわたって論争を続けた。

◇ 中川明夫(尚綱大准教授)

●韓国人の考えは、何が正義で正統か、何が絶対的に正しいか、そのために何をすべきかを議論する朱子学の理気論に因っている。価値観を自己絶対善と自己絶対正義に置くことで、妥協を許さず、相手を批判し他を傷つけるイデオロギーなので、李氏朝鮮では神学論争に明け暮れ自家撞着に陥った経緯がある。

◇ 韓国語のウィキペディア

●仏教に例えると朱子学は教宗(禅宗以外)であり、陽明学は禅宗である。朱熹が、キリスト教の教父哲学完成者トマス・アクィナスのように經典を集大成した解釈学の大家であれば、王陽明は、宗教革命を触発したマルティン・ルターのように、その經典を内面化して自己の実践(知行合一)を力説した革命家であった。

◇ その他

●朱子学は封建社会を支えた学問、陽明学は行動派知識人を育成した学問。●朱子学の持つ問題点……最大の問題は「愛」が欠けていること。●民主的な政治には、批判勢力は常に必要だが、朱子学は既存の政治体制を無条件で承認。●陽明学は、これまでの儒教と朱子学の教えを真つ向から批判した革命的な思想。儒教や朱子学では動くことよりも知識先行の静を重視した。陽明学の場合は論よりも行動することを重視する「知行合一」を説く。自己修養による「理」を重視する朱子学とは異なり「心即理」という概念を重視して「人に備わっている活発に活動する心」を「理」とした。「親や目上の人に孝行」という儒教の考えから「孝行に値するかよく考え、間違っているなら孝行する必要はない」という教え

は従来の教えを真つ向から反対するものだった。

その他にも似たような主張や解説が多くある。大分、判りやすくなった。

韓国の歴史や政治において、何事も極端に「白」か「黒」に分類して「中間色」を認めない風土は、先天的・民族的というよりは、やはり「朱子学」の影響と見て良いのだろう。

ここで、韓国における「例題」を考えて見たい。

文在寅の所得主導成長政策

文在寅政権が発足して一年半、当初の政策の結果が現れ始めた。反日政策や北朝鮮と仲良くやって朝鮮半島に平和をもたらすという政策は、今でも多くの国民に支持されているが、それが具体的な成果として結びつくのは将来のことであり、未だ成果は皆無と言って良いだろう。むしろ、その政策があるゆえに、激変する環境に対応するのに手足を縛られて自縄自縛となる弊害が目立つ。

文在寅は理想に燃えて、① 最低賃金の引上げ(三年間で時給六四〇円から一〇〇〇円に)、② 労働時間の短縮(週68時間から52時間に)、③ 非正規職の正規職への転換、更には、④ 公共部門での81万人の働き口を創出、を骨子とする「所得主導成長政策」を展開している。分配改善を通して家計で使える

金を増やし、それにより、内需を刺激して雇増につなげ好循環を生むというのが目論見である。

しかし経済学者の間では、話にならない、というのが大部分であった。成長政策に所得主導成長論を実験する国は世界主要国のうちどこにもない。いわば経済学者から総スカンを食らっているのに文在寅はそれを強硬に進めた。

一年半の成績表は惨憺たるものであった。誰でもわかるように、最低賃金が引き上げれば、弱者の雇用を担っていた中小企業や個人企業が一斉に人員削減に乗り出す。そのために豊かになるべき低所得層は就業の機会を奪われ、逆に貧困を加速してしまう。それが一年後の韓国の統計で早くも実証されたのである。

所得下位20%の「第一階層」の所得が前年同期比8%減、下位20%~40%の「第二階層」の所得が同4%減になってしまったのに対して、上位20%の「第五階層」の所得は逆に同9%増を記録したのである。目標と逆の結果、エミール・クーエの「努力逆転の法則」の世界である。

所得の減少ばかりではない。肝心の雇用状況が極度に悪化している。世界が好景気を謳

歌して中、韓国ではリーマンショック直後の悲惨な状況に近づいている。

また労働時間週52時間への規制は、多くの企業に恐慌をもたらし、もはや韓国国内への設備投資をやめて、一斉にベトナム等へ逃げだそうとしている。設備投資が止まっただけでもGDPへの影響が大きいのに、仕事が海外に流れては、どうにもならない。十月度の韓国株式KOSPIは全世界の株価の下落の中で最高の十五・三%を記録した。

その上、雇用創出政策として81万人に及ぶ公共部門の採用拡大を図っているが、地方公務員に求職活動が集中しすぎてしまい、結果的に失業する若者が増えてしまったという。これもエミール・クーエの「努力逆転の法則」である。

このような悪循環がいま韓国を覆って、経済活動そのものが危機的な状況にある。生産性増大を伴わない賃金引き上げは韓国への投資を止めて資金を引き揚げる動きを加速している。

それにもかかわらず、大統領スタッフはフアクトを示す統計資料を理想に合わせて(ねじ曲げて)解釈し、過去十ヶ月、連続して「景気は回復中」と言い続けて来た。そのために女性の統計庁長官を更迭して統計調査方

法を変更し、それに異を唱えるマスコミに対して軍事政権並に言論統制を強化している。

しかし、ここに来て遂に文在寅も雇用問題で責任を認めざるを得なくなった。都合によって、現実を理想で書き換える朱子学的な行為が破綻したのである。

また、文在寅政権は建設中の原発の中断や稼働中の原発も将来的に廃炉とする「脱原発」宣言を行った。

まず電力が不足し始め、火力発電の燃料費増で電力会社が悲鳴を上げている。いずれ電力金の大幅値上げは避けられない。

また李明博政権時にサウジアラビアの原子力発電所工事を日本提案の六割(一兆円)で受注したことを「積弊」として、問題にしたところ、サウジアラアのムハンマド皇太子から一喝された。その後四十兆円もの膨大な工事が控えているのである。文在寅政権は平謝りするしかなかった。そうでなくとも、今後「脱原発」を宣言した韓国に誰が原発を発注するか。原子力関係の技術者の国外流出が続いている。

最低賃金を引上げる、労働時間を短縮する、非正規職を正規職に転換する、公務員を増員して良質の職場を創設する、原子力発電をやめる……これらは、いずれをとつても

「自己絶対善」、「自己絶対正義」であり「善

政」を目指している。だから、文在寅の支持率は、歴代大統領の中でも特出して高く、就任一年間ほぼ80%台を維持していた。民主的な国家にあつては信じられない超高支持率である。

しかし、惨憺たる経済の現実の前に、支持率が急落している。

それに対して、文在寅が持ち出したのが、もうひとつのポピュリズム、親北朝鮮政策である。

南北統一は韓国国民の夢である。統一して結果がどうなるか考える前にかく「絶対善」で、その政策を掲げると支持率が無条件に上昇する。平昌オリンピックのアイスホッケー南北合同チームがそうであった。ましてや南北朝鮮首脳会談は特効薬である。四月、五月の首脳会談は68%まで下がっていた支持率をいきなり83%まで回復させた。九月の南北首脳会談も49%まで下がった支持率を61%まで回復した。

その後も文在寅は欧州歴訪によって「北朝鮮制裁緩和」を掲げ点を稼ぐつもりであったが、全ての主要国が「完全かつ不可逆的で検証可能な核廃棄」に一致しており、同時に訪欧中の安部首相に完敗を喫してしまった。それを韓国マスコミが叩いているので、文在寅も「問題ない」としていた国内経済に顔を向

けざるを得なくなっている。更なる支持率の低下は免れないであろう。

九月二十六日から始まった全世界的な株価暴落は、十一月六日の米国中間選挙結果次第で、年末に向けて更なる大暴落に繋がるとの憶測もある。その中で、最大の被害を被るのが韓国である。現実を眼をつむり「自己絶対正義」に頼る文在寅政権が現実によって厳しい審判を招く日が近づいている。

(十月二十五日現在で、史遊サロン通信への投稿がひとつも無かった。何も無いのはさびしいので、急遽ダラダラと書いた原稿である。有り難いことに、その後二件の投稿があったので、もう少し短くしようと思ったがそのままにした)

『史遊サロン』267号(11月)は10月末時点で入稿がなかったので、何か話題を提供しようと思った。たまたま9月20日、明治大学博物館で「弥生初期青銅器と燕の將軍樂毅」という講演を行ったので、時間が空いたらそれを紹介しようと思い準備準備した古い「新聞記事」である。

平成19年(2007年)12月2日 日曜日

産 経 新 聞

弥生時代の実年代

西暦	中国	歴博の分析	従来の年代
1500	商(殷)	後期	後期
1000	1027	晩期	縄文
	西周 770	早期	
500	春秋	前期	弥生
	403		
	戦国 221		
紀元前後	202 前漢	中期	早期
	8 後漢	後期	中期
250	25 後漢	古墳	後期

弥生時代に日本に初めてもたらされた青銅器は、戦国燕の將軍、樂毅が奪った宝物の再利用品では。韓国国立慶尚大学招聘教授の新井宏さん(金属工学)が学術誌「考古学雑誌」(日本考古学会編)で、弥生期の青銅器についての研究論文を発表した。含有されている鉛の分析で、弥生中期の青銅器の成分が、時代を400〜500年もさかのぼった商(殷)や西周の青銅器と共通点があることが判明。日中の青銅器の伝播にミステリアスな「空白期」が生じること。新井氏は「樂毅の略奪が介在した」と推論する。古代の鉛に注目した新たなアプローチは、弥生論争にも一石を投じるか。

(牛田久美)

日本に伝播 青銅器 商・西周と共通点

特殊な鉛含有

新井氏は、青銅器材料に含まれる微量の鉛を測る鉛同位体比法により、日中の青銅器計約3000個のデータを解析。弥生関連の1052個を鉛同位体の比率の違いに注目して分類、共通点を探った。

その結果、弥生前期末から中期初めのものとされる青銅器は、中国最古の王朝とされる商(殷、前17〜11世紀)や西周(前12〜8世紀)の時代に多く見られる青銅器と、鉛同位体比が一致す

鉛同位体比法 融点が低く、製錬しやすい鉛は古くから世界各地で用いられてきた。質量により4種の同位体があり、その比率が鉱山によって微妙に異なるため産地の推定が可能となる。青銅器の場合は複数の金属が混合使用されるため判定が難しいとされてきたが近年、形状が異なる青銅器の同時生産の可能性や、似た青銅器の生産時期の違いなどの判定に威力を発揮、測定事例が増えている。

空白期の謎 弥生年代論争に一石?

ることが判明した。鉛の種類としては極めて特殊なものが含まれていたという。

注目されるのは、特殊な成分の鉛を含む青銅器が日本に流入するまでに「空白期」が生じることだ。青銅器や鉄器は朝鮮半島経由で伝わったと考えられるが、商の時代といふのは、日本では土器文化の縄文時代にあたる。新井氏は「樂毅介在説」を前提に「旧来の中国では、春秋、戦国、秦、漢の時代(前8〜後3世紀)を通じてこの特殊な鉛は使われなくなった。商の鉛は長い空白期を経て、不思議なことに日本に突然現れた」と推測する。

新井氏は、この空白について「前284年、中国北東部にある燕の將軍、樂毅が斉を攻め、都から宝物を奪ったと漢代の歴史書『史記』に記述がある。樂毅が奪った青銅器が再利用され、日本へ伝わった」と推測する。

弥生時代については、国立歴史民俗博物館(歴史博)が4年前、放射性炭素年代測定による分析の結果、弥生期の幕開けは紀元前10世紀へさかのぼると発表して話題を集めた。従来の定説では、日本へ青銅器が初めて流入したのは、前250〜200年。遼上説をとる歴史博によると前370年ごろ。新井氏は「樂毅介在説」を前提に「旧来の中国では、春秋、戦国、秦、漢の時代(前8〜後3世紀)を通じてこの特殊な鉛は使われなくなった。商の鉛は長い空白期を経て、不思議なことに日本に突然現れた」と推測する。青銅器を再利用したという話は憶測と仮定でしかなく、論理に飛躍がある。ただ、鉛に着目して年代の議論を試みることは面白い」としている。